

随想

旧職員 松谷 勲 鐵

昭和四十四年四月から四十九年三月末までの勤務であった。このおよそ三千余日は、多くの碩学の師に恵まれた日々であった。

その間で、昭和四十六年（一九七一）度は異例の年であった。京都新聞七月十六日夕刊の見出しには「修学旅行の山城高生、六人、途中で帰る、服装で先生とトラブル」とある。旅行は信州方面四泊五日、参加者は二年生三九八名（不参加者は九名）であった。記事から抜き書きしてみると「修学旅行にあたっては、生徒の修学旅行委員会をつくり、事前に四国、九州、信州の三方面を生徒にはかり、もっとも希望の多かった信州方面を選定したのであるが、生徒の中には強制的な旅行選定だという意見や日頃からの学校行事に対する不満があったことからこのハプニングがおこったらしい。」とあり「学校側では、これを機に今後は修学旅行を含め学校と生徒のあり方を再検討するこ

とにするといつている。」とある。また、京都新聞十月八日夕刊の見出しには「先生あやまれ！ 生徒騒ぐ 山城高 爆竹遊び」「人違い」上級生が仲裁 小競り合い けが」とある。このころ校内では市販の花火玉に細工をし、ろうそくで点火する爆竹（爆竹は百本が八十円）がはやり出し、授業が中断することも始めている。記事から抜き書きしてみると、「六日、二時間目の授業が始まった午前九時二十分ごろ、S館二階便所付近から「バーン」という爆発音がした。巡回中の教諭がかけつけると、便所内にA君がおり手に投げ玉のような爆竹を持っていたので、A君の仕方さと思い、職員室へ連れて行こうとした。ところが、その後、爆竹を鳴らしたという生徒が現れたため、A君は「犯人扱いした。土下座してあやまれ。」と要求。これに同調する二年生約十名も先生を取り囲み「窓から落してやろか」など暴言をはきながら謝罪を要求した。教諭と生徒の押し問答が一時間ほど続いたところ、さわぎを聞いた生徒が続々集まり、うち先生に同情した三年生ら十数人が「いいかげんにしろ。先生に土下座とは何事だ。」と怒りだし小競り合いになった。このため二年生B君がヒザに十日間の打撲傷を負ったという。生徒たちはその後、集会を開き、暴力はふるわない、爆竹遊びはしないなどを決議して騒ぎはおさまった。」とあり、「学校側では、底流にはむずかしい教育問題がひそんでいることもうか

がわれ、生徒とよく話し合って問題を解決して行きたい。しかし暴力だけはいかなる事情があっても許されず、きびしく注意すると話している。」とある。

なお、当時の新聞七月十六日夕刊には「十五日京教大付属高校で校舎の一部封鎖騒ぎがあり、十六日機動隊が出動、生徒四名逮捕、生徒自治会主催の全校集会が開かれ、約三百人が機動隊導入をめぐる追求。」の記事が、十月八日の夕刊には「第一次羽田闘争四周年にあたり、制私服警官三百人が京大教養部などを凶器準備集合と暴行、窃盗の疑いで搜索し、過激派の動きに先制。」との記事もある。

異例の年を新聞記事によって巻き戻してみた。しかし「記事」はニュースであって、「事件の本質への報道」ではない。事件への対応のため連日のように会議がもたれたのであったが、気がかりな問題を残しつつ年は暮れた。

今これらの「記憶」はひっそりとした流れの中にある。当時の社会状況下で、事件の渦中にあった生徒たちは「知命」となっている。とりとめもなくある種の悲しみがよぎる昭和四十六年度である。